

首里城再建を 考える

①

独自性と大龍柱 ④ 西村貞雄

農民に衝撃が広がった首里城火災から1年を控え、再建に向けた動きが進む中、さまざまな視点で首里城再建について議論が繰り返されてきた。

2019年10月30日に首里城を約40人で巡視した。その翌未明に首里城は火災に遭った。正殿が燃えていくのをテレビの映像を見た。目を疑うような信じがたい情景の中で大龍柱だけが奇跡的に焼け残った。

大龍柱の形を復元した状況を思い出し、歴史的に複雑な状況が過去には遺つたことが思い出された。

平成の復元当時から大龍柱には「向き」についての関心が多く、今回、話題になってきたが、今回、正殿の遺物が焼失した直後から大龍柱の向きを正面に向けていくべきかの動きがある。

大龍柱の「向き」の混乱の

復元で他にない形態解明 「寸法記」絶対視の傾向

【寸法記】、異立装大龍の「寸法記」、異立装大龍の「寸法記」、異立装大龍の「寸法記」を判断した結果である。



首里城の焼け跡に残った一対の大龍柱＝2019年12月、那覇市

絵図だけの判断
絵図だけで大龍柱の「向き」を判断する事は難しい。なぜならば、どの絵図も一方から捉えた描写であって前後左右からの表情が確認できないからである。

残された絵図は何種類ある。「寸法記」の絵図は高さの記載などがあるが描かれた機軸の大龍柱の形には位置関係や雲龍気はあっても具体的内容がなく、現代の写実性の高い描写とは違う。また、その他多くの鳥瞰図の中に標で

もつて小さく描かれている大龍柱という具体的な形には種々異なる点がある。また、柱間が3間で未広の階段と、柱間が1間と平行的な階段と、柱間が3間で未広の階段と両方ある。

私が大龍柱を復元した過程から判断すると、1768年の「寸法記」以降の復元は元々未広の階段であるが、1768年以前は上行な階段であったと推測する。鳥瞰図に平行的な階段、未広の

明治以降の写実には大龍柱の全容の姿はなく、胴体中央部が欠落し短くなった写真であったため大龍柱の形態がつかめず、短くなった大龍柱の写実に物足りなさを感じて「寸法記」の絵図に関心が集中し、「寸法記」の絵図が重視される傾向があった。

実物大で再現へ
大龍柱復元の最初の取り組みは、全容の形を写真にもない状態であった。幅5分の1の大きさで取り組んだ。鎌倉秀太郎撮影の大龍柱拡大写真がなかったら復元は難しくなったが、細部まで写された

この曲柄は鎌倉下部の巻いた形はトコロであると判断した。聖の動物である龍には前脚と後脚があるが、この龍柱には大三角の胴体が垂直に伸びる中に前脚を上下に構え、その前脚は宝珠を握り、下に向けた前脚は翼の広がりのある構えを造っている。トコロを巻き鎌倉を構える形と形を呼んで王座に類似する体勢とを大きく四角柱に構えて伸びる基礎に同伴化した大龍柱という独自の形態をもつのは他は事例がなく、首里城正殿にのみ存在しない。

また、「蛇がトコロを巻き鎌倉を構える」ということとはあるが、「龍がトコロを巻いて鎌倉を構える」という事例もないことを考えると不思議である。

このような形態の大龍柱を正殿の正面階段小龍柱と大龍柱として位置付けているのは、守護という役割を正面階段に配置していることで重要な意味が、首里城正殿の独自の「向き」を沖縄県民は知る必要がある。

大龍柱は太い四角柱の胴体から垂直に伸びた龍柱を軸にして、残された写真には胴体中央部がなく、上部には頭部があり下部にわずかに巻いている尾の先端があるが、形を確認するには途中が切断されて中途半端な状態であった。

上部・頭部と下部の巻いた尾の先端から徐々に形を造り上げていきながら、全体を見て胴体中央部を説明していく中、下に向けて構える前脚の掌の形と下部に巻いている尾の形とを追求していく事によって下部の巻いている形の複雑さと上部・頭部との頭の曲柄を関連させて考えると、



にしらお・きたあ 1942年南城市佐敷生まれ。琉球大学名誉教授。東京大学大学院文学研究科専攻。沖縄の日本学専攻を専攻し、1993年に博士号を取得。首里城正殿の復元に関わり、実証設計委員会委員を務め、大龍柱などを制作した。

首里城再建を 考える

②

独自性と大龍柱 ⑤ 西村貞雄

大龍柱の姿を解明した結果、1768年の寸法記の絵図は、復元した形とは異なっていたことが明らかになった。この絵図には大龍柱の高さ(3106)が明記されている。トコロを巻き鎌倉を構える形と形を呼んで王座に類似する体勢とを大きく四角柱に構えて伸びる基礎に同伴化した大龍柱という独自の形態をもつのは他は事例がなく、首里城正殿にのみ存在しない。

また、「蛇がトコロを巻き鎌倉を構える」ということとはあるが、「龍がトコロを巻いて鎌倉を構える」という事例もないことを考えると不思議である。

このような形態の大龍柱を正殿の正面階段小龍柱と大龍柱として位置付けているのは、守護という役割を正面階段に配置していることで重要な意味が、首里城正殿の独自の「向き」を沖縄県民は知る必要がある。

正面向き設置に存在意義 欄干に連結 龍脈の役割

文化

柱・御座という配置から考える必要がある。大龍柱がなぜ約3分の1の高さなのか、形態はそのもの意味から、大龍柱の前後・左右・上下・表裏からの組み合わせにも注視



※首里城正殿跡から出土した欄干に使用されたと思われる柱と羽目石（県立埋蔵文化財センター蔵、筆者撮影）※大龍柱を欄干につないだ想定図（筆者描く）

大龍柱の姿を解明した結果、1768年の寸法記の絵図は、復元した形とは異なっていたことが明らかになった。この絵図には大龍柱の高さ(3106)が明記されている。トコロを巻き鎌倉を構える形と形を呼んで王座に類似する体勢とを大きく四角柱に構えて伸びる基礎に同伴化した大龍柱という独自の形態をもつのは他は事例がなく、首里城正殿にのみ存在しない。

また、「蛇がトコロを巻き鎌倉を構える」ということとはあるが、「龍がトコロを巻いて鎌倉を構える」という事例もないことを考えると不思議である。

このような形態の大龍柱を正殿の正面階段小龍柱と大龍柱として位置付けているのは、守護という役割を正面階段に配置していることで重要な意味が、首里城正殿の独自の「向き」を沖縄県民は知る必要がある。

干によってつながれている。小龍柱・大龍柱が未広の欄干に配置される事によって龍の流れと構えが造られ、正殿の建物と階段・御座への龍脈としての役割が見えてくる。

正殿の正面に唐破風という純粋の日本建築様式がある。その唐破風を支える向拝柱4本は、内側の2本の間隔が小龍柱に、外側の2本の間隔に合わせ大龍柱が位置付けられて、それを下ろす欄干によって未広の階段が造られている。

小龍柱の向形・形は左右の欄干につながって向き合う。また小龍柱の向形が大龍柱の向形へと、それぞれ欄干によってつながる。

文様のない台石
現在、大龍柱は大きな台石に据えられて建てられている。その原因は1768年の大地震による影響があったと推察できる。当時の記録に「城壁57ヶ所損壊」とあったことから判断すると、約3分の1の高さの大龍柱は欄干とつながり、羽目石・地盤石で固定されて外れ、応急措置として台石に設置された可能性がある。その判断は、台石が接続した欄干の根拠が台石を盛り付け、「ほぞ」の溝が羽目石につなぐ「ほぞ」が台石に埋められている。明治・大正・昭和（戦前ま）の大龍柱の拡大写真から読み取れる。この機軸のある欄干が沖縄県立埋蔵文化財センターに収蔵されており、欄干に羽目石の遺物を「ほぞ」につなぐべく合わせる「ほぞ」が台石と、当時のものだと判断できた。

親柱の「ほぞ」から判断しても応急措置として設置された欄干に繋がっている。正殿の建物と階段・御座への龍脈としての役割が見えてくる。

宝珠と龍の関係
正殿の龍は宝珠と珠との関係があり、龍柱も「宝珠」を握っている前脚御座に向けている。小龍柱の場合は、阿形（向かって右）は左前脚、形（向かって左）は右前脚にそれぞれ宝珠を握っている。阿形（向かって右）は左前脚、形（向かって左）は右前脚にそれぞれ向き合う形をとり、「珠」だけは御座に向けている。

大龍柱においても小龍柱と同様に、大龍柱の背間で欄干とつながると正面に向けて阿形（向かって右）は左前脚、形（向かって左）は右前脚にそれぞれ向き合う形をとり、「珠」をそれぞれ握る。阿形（向かって右）は左前脚、形（向かって左）は右前脚にそれぞれ向き合う形をとり、「珠」をそれぞれ握る。（随時掲載）

大龍柱が相互に連結し合っても応急措置として設置した欄干に繋がっていると見て、正殿の左右、大龍柱・小龍柱（大龍柱）から中心へ、向拝柱の背間で欄干・大龍柱が正面（御座）へと龍脈の流れが造られ、大龍柱は正殿の龍脈の結末であることから台石を取り除き欄干に接続する意味がここにある。

首里城正殿の中心性や正面性は、「台石」「見立て」「特色」「独自性」「特殊性」などであり、首里城正殿の中心性を生かすための、発想や工夫から生まれたものである。抑制表現として生まれた美意識につながるものである。（随時掲載）